日本学術会議
我が国の学術の発展・研究力強化に関する検討委員会
2022年3月28日

大学は何処へ

―時間論として大学の未来を考え直す―

吉見俊哉
（東京大学）

お話の前提

ご依頼⇔「教育の未来の話ならできますが、研究の未来の話はできません」 →OK

大学の未来＝研究　×　教育　×　社会的実践

（これまで）　　（これから）

←　時間のマネジメント（メリハリ）

1）履修科目数の半減

2）単線主義から複線主義への転換

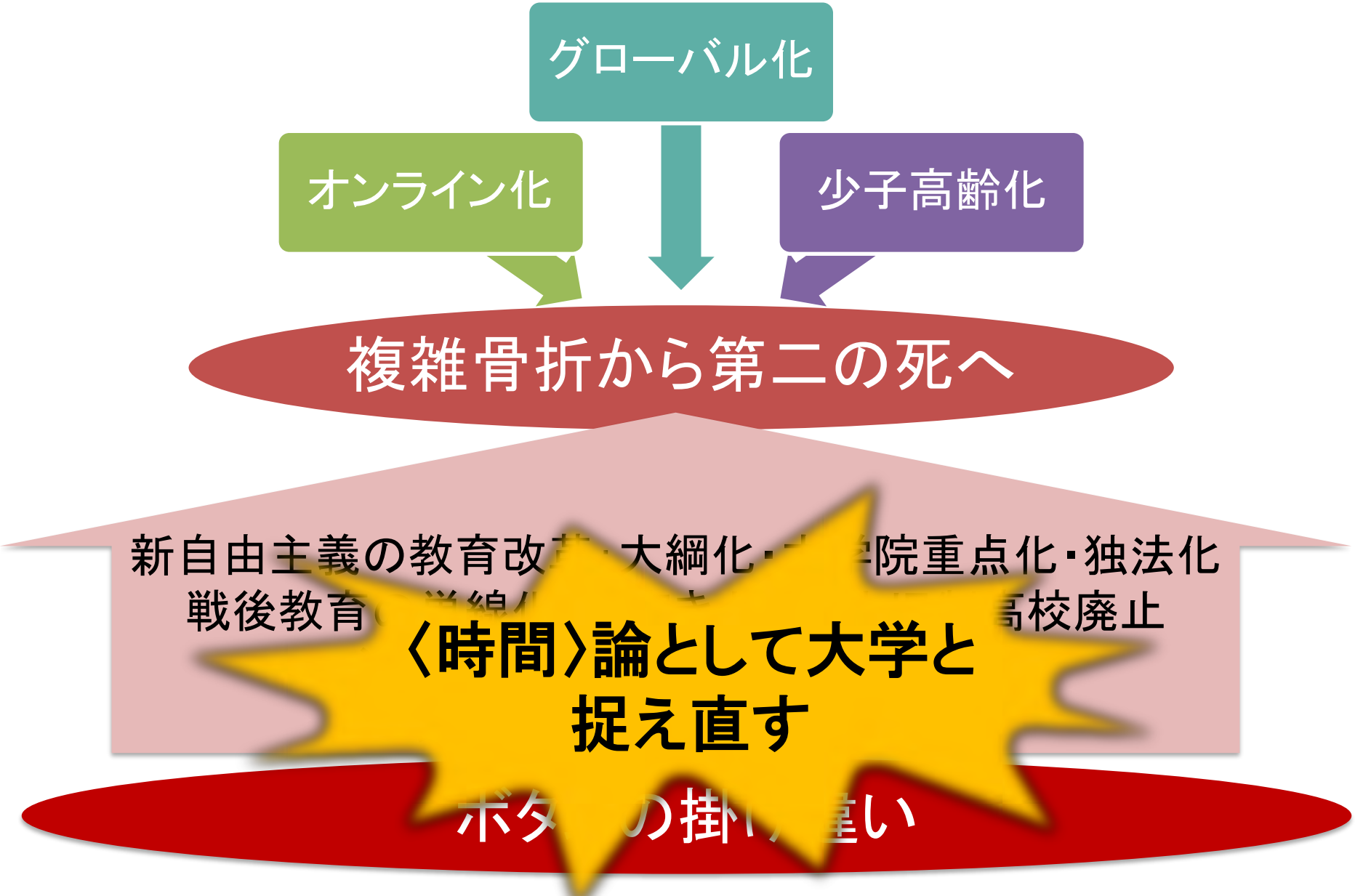
3）単眼主義から複眼主義への転換

（本当は、日本の大学の研究力強化のための最大のポイントは上記と別にあるが、これについては論じない。）

Chapter 1

問題の核心にある「時間の劣化」

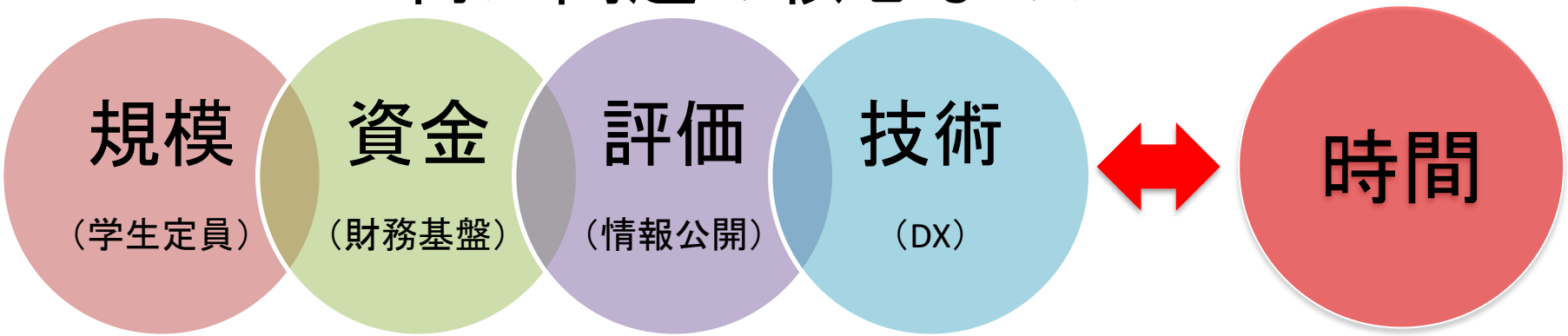
大学危機の構造：歴史と現在をつなぐ



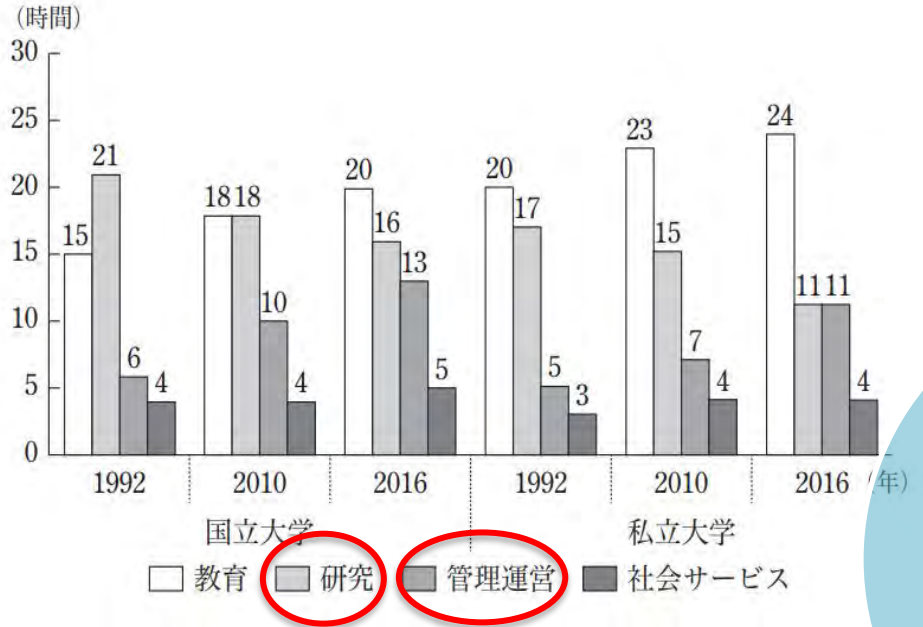
大学改革における数々のねじれ

18歳人口の減少　⇔　大学数・収容力は増加
地方創成の中核としての大学　⇔　進学率の地域格差は拡大
外国人留学生の増加　⇔　日本人の海外大学留学は減少
評価作業への多大な労力　⇔　既存教育研究体制は温存
学修実質化のかけ声　⇔　学生の自律的学修時間は変化なし
外部資金獲得の増加　⇔　研究時間、学術論文は減少
博士学位の生産に努力　⇔　博士課程進学希望者の減少と劣化
（まだまだ他にもある数々のねじれ）

何が問題の核心なのか？



大学教授たちの疲弊：１人３役はこなせない

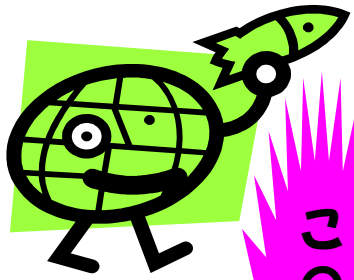


（出所）藤村正司「研究生産性――研究費，それとも研究時間？」（『IDE』2017年10月号）より．

図 1-1　1週間の平均仕事時間の推移：学期中

いまどきの大学教授は、このすべてができなくてはならない！

やっぱり大学を改革しなくっちゃ、、、



二極化する大学教授

この矛盾を生きる

私をそっとしておいてほしい、、、

有限の時間の中にいる学生と教師

- 学部教育が大切だが、授業がつまらないという学生の声が聞こえてくる

← 忙しすぎて準備できない

- 研究力低下の本質とは何か

← 集中できる時間の不足

- 研究者の人生の時間の不安定化

→ 長期に持続的な研究ができない

- 学生サイドの学ぶ力の劣化

← 受験＋就活で忙しすぎる

就活、会議、管理業務、外部資金獲得に蚕食される教育研究時間

時間の劣化！

柔軟で質の高い時間のマネジメント！

1. 科目の時間構造：履修科目半減
2. カリキュラムの時間構造：複線化
3. 人生の時間構造：リカレント実質化

Chapter 2

時間のマネジメントとしての大学改革

履修科目数の大幅削減：学生

- 学生が1学期間に履修する科目数：
  - 米国：4～5科目　４年間で30科目程度
    →１週間に2～3回の授業：ゼミに近い
  - 日本：10～12科目　４年間で60～70科目
    →１週間に1回の授業：出席して渡り歩く

似て非なる日米の授業

- 科目平均単位：米国：３～６単位/学期　→落とせない
  日本：１～２単位/学期　→捨てられる

大学＝意欲ある優れた教師と学生の出会いの場

←「多く、軽く」から「少なく、重く」への転換

- 各週2～3回の開講、予習・復習（実質的な学修時間）の徹底
- 履修のスーパーマーケット型からコーチング型への転換
- ４年間で学ぶ30～35科目の学生視点での設計

開設科目の大幅精鋭化：教師

- 科目過多の授業体制から抜け出せない理由
  - 専門知識網羅主義：すべてを教えないと気がすまない教授たち
    ←学修者の潜在的可能性の過小評価
  - 科目数が多いことによる自己満足 ⇔ シラバスの負担感
  - チームティーチングの未発達（個人商店社会の限界）
  - 非常勤講師への依存（若手雇用、質の凸凹、体系性の欠如）

→ 科目数の大幅削減とチームティーチングの戦略的導入

- シラバスの日本的解釈の是正（脱商品カタログ）
  - 米国：10～15頁　学生との契約書、シナリオ
  - 日本：1～2頁　15項目のテーマ＋参考文献
- TAの日本的解釈の是正（キャリアとしてのTA）
  - 米国：初期キャリア＝トレーニング　→ 授業＋評価も担当
  - 日本：教授のお手伝い＝大学院生への経済支援

時間に余裕がない日本

→　非常勤講師依存からTA組織化への抜本的転換

クオーター制導入による履修科目数の半減

履修科目半減への障壁：

- 「先生の科目はもういりません？」
- 「先生の科目は倍の回数の授業をしてください？」

← これは、言えない！　むしろ、まず必要なことは、

１週間の履修科目数の大幅削減＝授業回数増

中央教育審議会教学マネジメント指針（2020年1月22日）

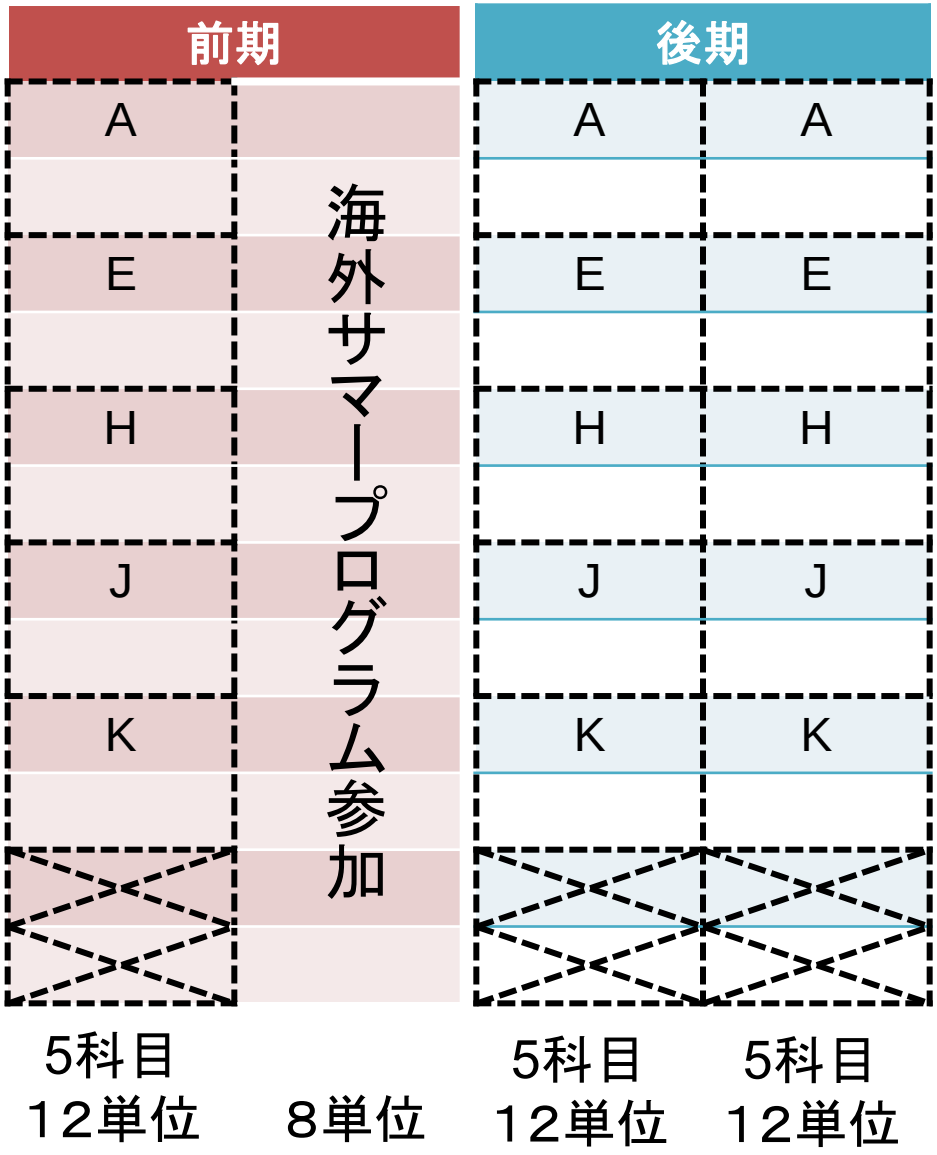
「密度の濃い主体的な学修を可能とする前提として、授業科目の精選・統合のみならず、同時に履修する授業科目数の絞り込みが求められる」

セメスター制からクオーター制へ：科目単位数を減らさない！

週1回15週＝2単位　→　**週2回8週＝2単位**

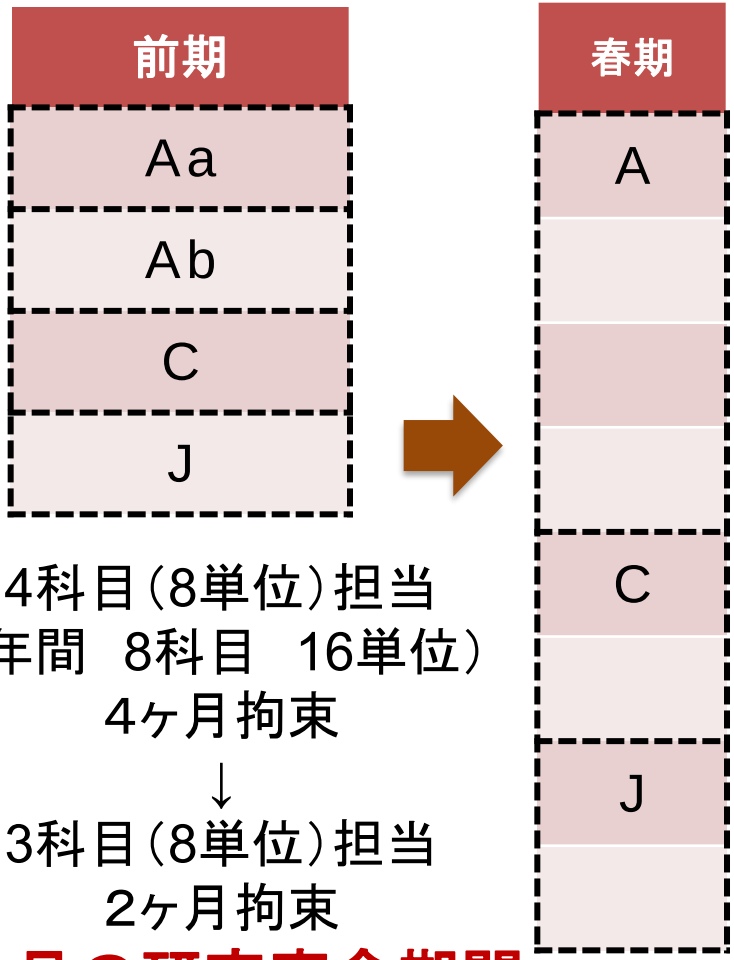
大学生活にメリハリをつける

学生Z　前期12科目（24単位）
後期12科目（24単位）
計48単位



計44単位

教授X　4～7月授業→4～5月授業



4科目（8単位）担当
（年間　8科目　16単位）
4ヶ月拘束
↓
3科目（8単位）担当
2ヶ月拘束

3ヶ月の研究専念期間

クオーター制時間割のパターン（例）

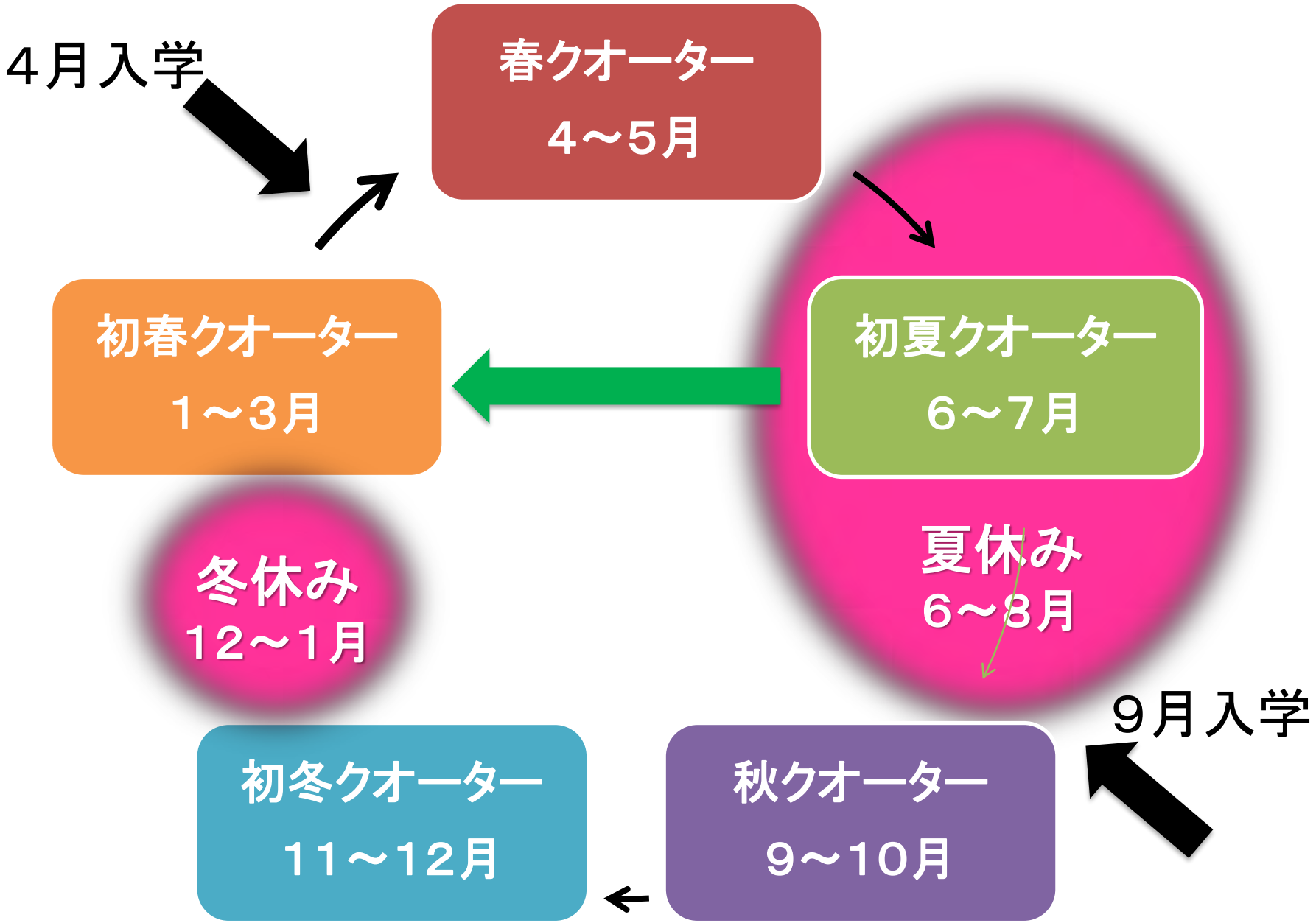
	月	火	水	木	金
1限	A	B	A	B	（A）
2限	C	D	C	D	（A）
3限	E	F	J	E	F
4限	G	H	J	G	H
5限	K	L	M	N	O
6限	K	L	M	N	O

X教授：
必修科目A
選択科目C
演習J
8単位担当
週2日

Y准教授：
基礎科目F
選択科目H
演習LO
8単位担当
週2日

週2コマ：6パターン、週3コマ：2パターン、2コマ連続：6パターン

夏休み（遊び＝創造）から考える学年暦

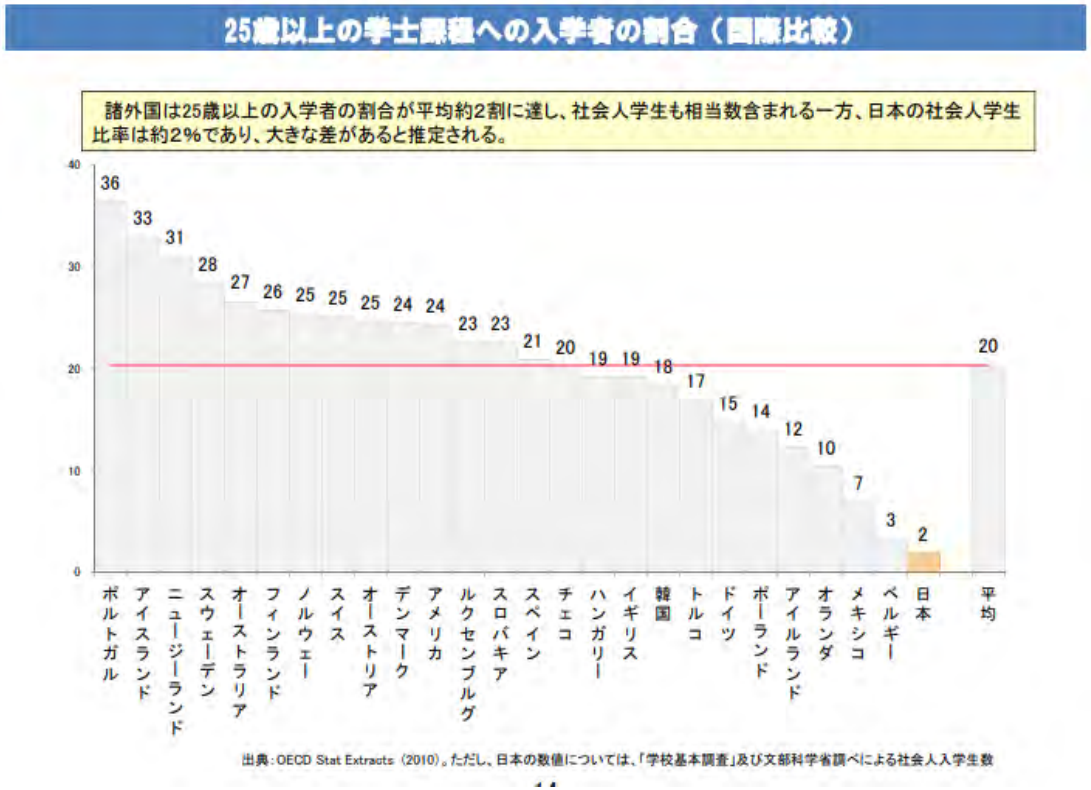


Chapter 3

複線主義と複眼主義への転換

日本の大学の盲点：社会人学生比率

- 日本の大学の社会人学生比率の尋常ならざる低さ！
  25歳以上入学者は2.5%、OECD25国中24位（ほぼ最下位）
- 「通過儀礼」装置としての大学（入試休暇、就活準備）
  ⇔「キャリアチェンジ」装置としての大学
- 数多のデメリット：
  - 学生の同質性
  - 学ぶ意欲の不可視化
  - 社会との接点の弱さ
  - 社会人学生＝少数派
  - 志願者マーケティング
- **根底にある入試の神聖化と出口管理不在**



人生/大学のマルチステージ化：3回大学に入る

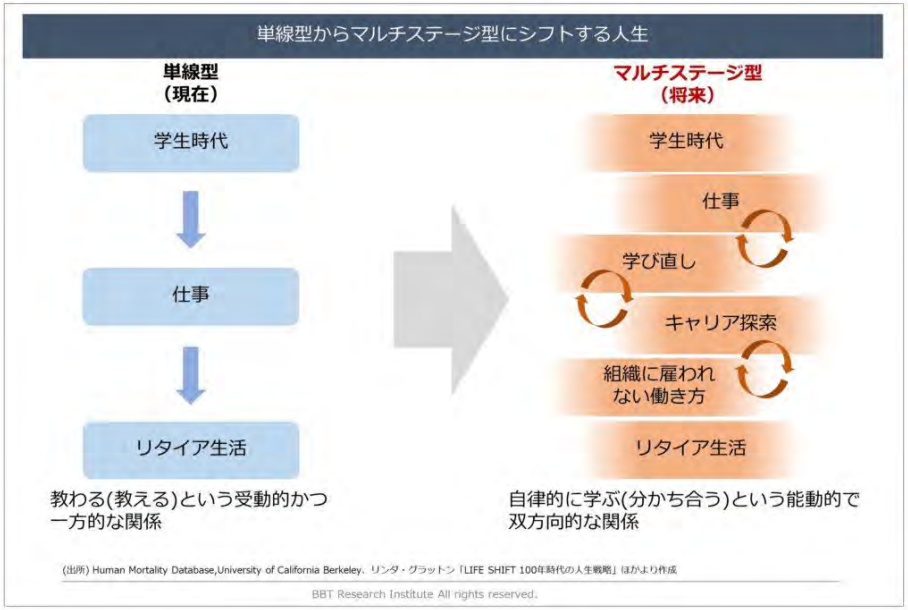
- 1回目：18～21歳
- 2回目：30～40歳代

就職後、現場経験を積み、管理職に道を歩むか、全く違う道に挑戦するかの転期。その時、もう1回大学に入り直し、何かを学んで違う人生を歩んでいく。

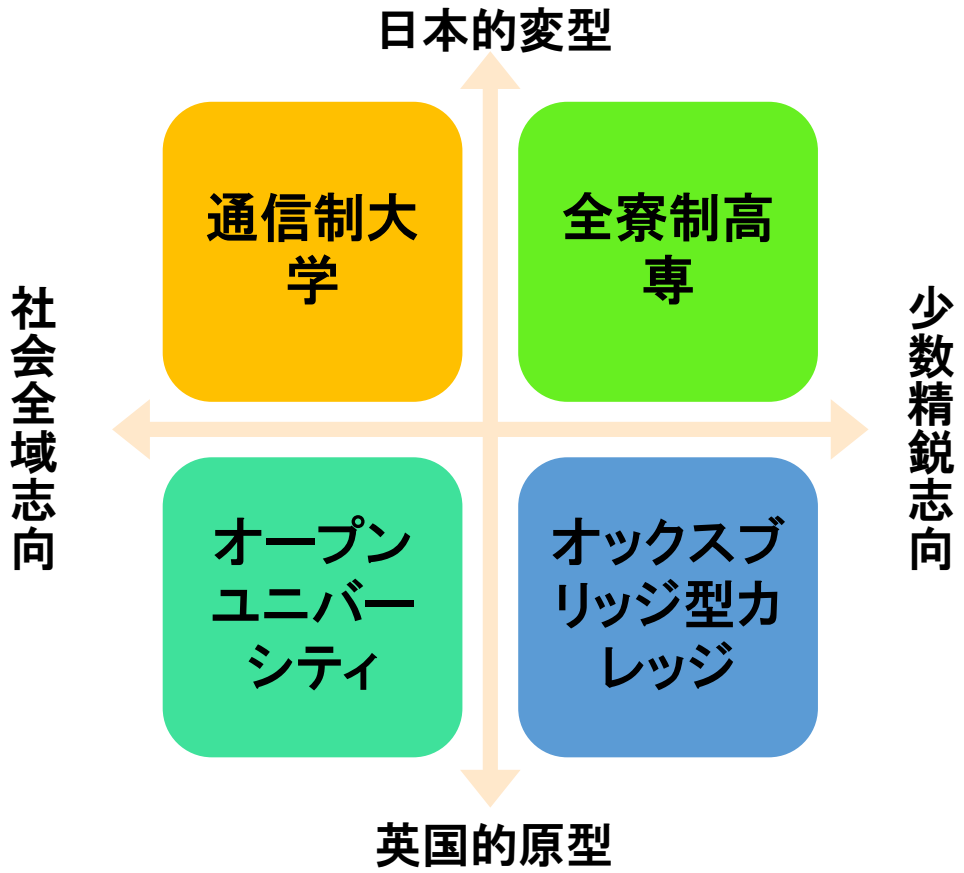
- 3回目：60歳前後

職場のキャリアを終え、定年が見えくる。しかし、今は75～76歳まで元気。厳しくても何か全く違う人生に挑戦する。

日本社会の年齢中心主義
↓
大学の学びと職業の無対応性

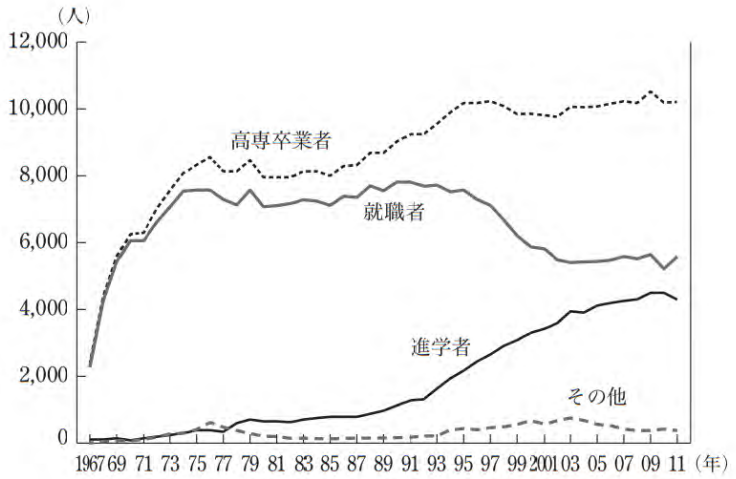


高等教育の複線的･異質的体制への転換



大学モデルの転換

頂点としての東大
大学教育を劣化・均質化させてきた入試信仰



(出所) 新谷康浩「データで見る高専」(『IDE　現代の高等教育』2012 年 10 月号)より作成.

図 5-7　高専卒業者の進路

(出所) 図 5-7 に同じ.

図 5-8　専門的技術的職業就職率の推移

第三の輪としての社会実践（参考　ミネルヴァ大学）

研究

＋

教育

課題発見・解決の実践知

目的遂行

社会的実践の現場としての地球社会

価値創造

ミネルバ大学の成功

- キャンパス廃止　世界中に寮設置
- 少人数オンライン授業＋社会実践
- 世界トップレベルの教授陣
- 世界各地の現場を遍歴

新しい地球社会の哲学・思想

文理融合から文理複眼へ：21世紀の宮本武蔵

理系 ⟷ 価値創造的で目的遂行的な知 ⟷ 文系

データサイエンス	法学
映像工学	美学
環境科学	歴史学（東洋史）
医学	哲学
防災工学	社会学

1本目の刀
【モデルの装置への実装】

2本目の刀
【テクストの精密な読解】

複眼的教育研究体制

メジャーマイナー／ダブルメジャー

学位プログラムは一元思考に陥っていないか？　→複眼的仕組みへ

「役に立つ」とはどういうことか？

目的に対する手段として「役に立つ」こと

＝目的遂行的（＝手段的有用性）

目的・価値を創出することで「役に立つ」こと

＝価値創造的（＝価値反省的）

手段的有用性は、与えられた目的に対してしか、「役に立つ」ことができない。

→目的についての価値尺度が変わると「役に立つ」という合意は消える

- なぜ、ソニーはアップルになれなかったのか？　→日本の家電産業の没落
- 東京五輪2020の混迷　←　東京五輪1964の価値軸の継続「速く、高く、強く」

　⇒新しい価値軸としての「ゆっくり、末永く、愉快に」

価値創造的：変化する多元的な価値の尺度を視野に入れる力

「目的遂行的知（工学系？）＝短く役に立つ」（3～5年）

「価値反省的知（人文系？）＝長く役に立つ」（30年～1000年）

旅する宮本武蔵とトランスナショナルな大学

- 米国におけるダブルメジャー履修の拡大：
  - 学部生の25～40%：コースワーク＋2つの専門
  - 典型的パターン：外国語＋国際関係論／経済学＋工学
  - 卒業後の収入アップ：離れた2つ＞近い2つ＞大学院

複数学部への所属

- ボローニャ・プロセス＋エラスムス・プロジェクト
  - ボローニャ宣言（1999、47ヶ国）⇒汎欧州的教育圏構築
  - 全欧州的に通用する共通の学位制度、単位互換制度
  - 学生と教員の国を越えた移動＝エラスムス（1987～）：
    190万人の学生、9割の大学が参加（欧州委員会＋大学本部）
  - 「ヨーロッパ的思考」を育てるカリキュラム構築

複数大学への所属

- Online+Hybrid Transnational Education（TND）の急拡大

コロナ・パンデミック

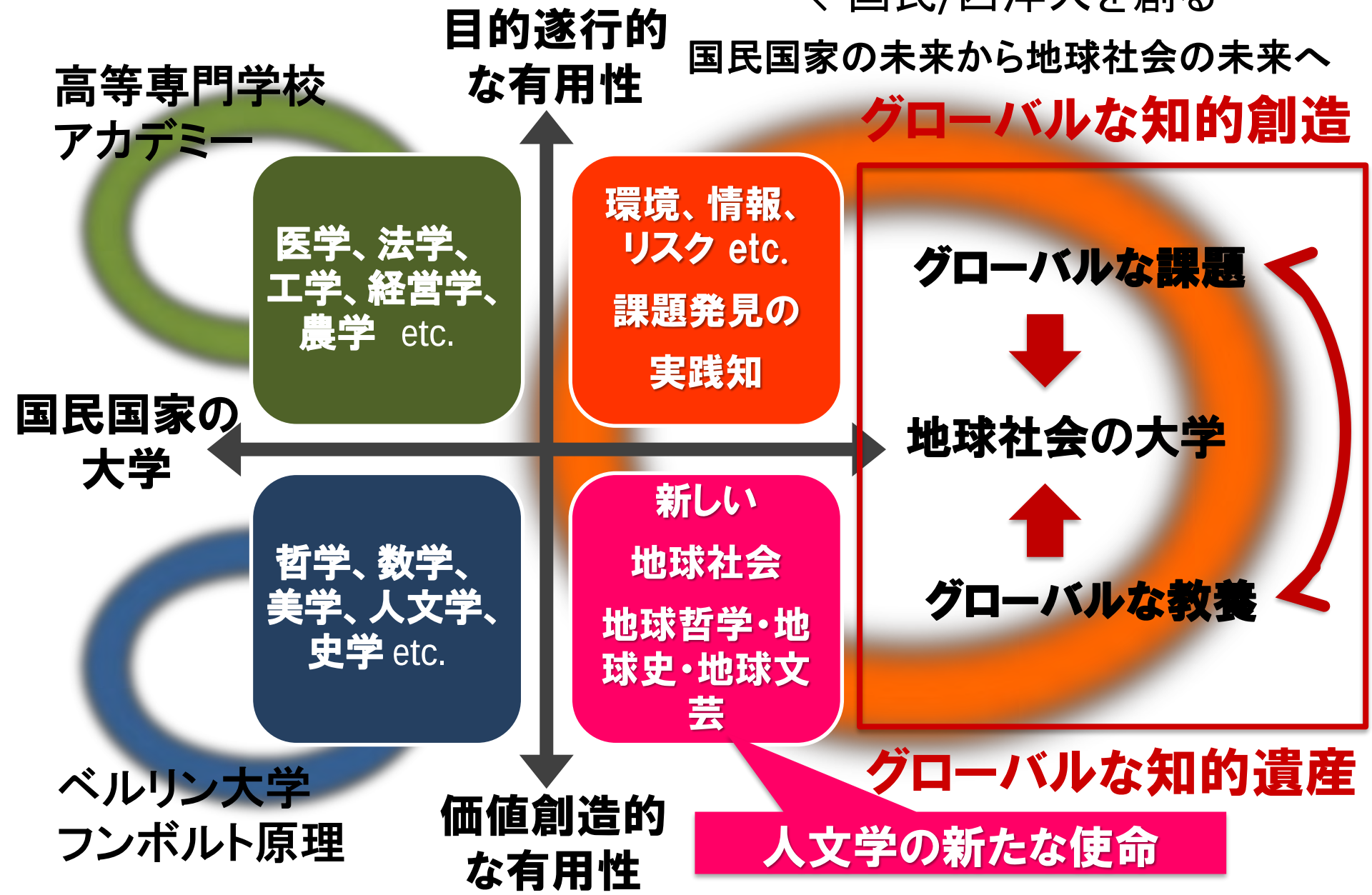
  - オーストラリアの大学による東南アジア圏大学生への英語による高等教育
  - より安価にオンラインをフルに活用してグローバルに通用する教育を提供

高等教育の複線構造化とグローカル化
新たな旅の時代＝第一世代の大学に似る第三世代

第三世代の大学 → 地球人を創る

←国民/西洋人を創る

国民国家の未来から地球社会の未来へ



脱甲殻類の大学：壁を越える流動性への道

コロナ・パンデミック

⇳

異質性・流動性の拡大
（知的創造性の基盤）

- 学部を越えた流動性：
  主副専攻の実質化（二刀流）、大学間の単位互換
- 地方と東京の間の流動性：
  学生、教員の広域的流動性（遍歴時代）
- 国際的流動性：
  6～7月問題、標準卒業年、授業の英語化
  ⇔最大の壁は時間的・言語的硬直性
- 世代間流動性：
  人生で3回大学に入る仕組み（18歳、30代、60歳）

← 〈大学＝時間〉のマネジメント
＝（1）1週間の履修科目数の半減
（2）年齢主義を解体し、人生で3回大学に入る社会の実現
（3）複数の専門を二刀流で学修する複眼主義の実現